

---

# 東方      ゆゑ穢

緑野ボタン 4 号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方 ゆ 餡 穢

### 【Nコード】

N1057U

### 【作者名】

緑野ボタン4号

### 【あらすじ】

とある男子高校生、悉皆屋ゆとりは、幼女妖怪となって幻想郷に転生した。彼のもつ能力は「あらゆるものを「ゆっくりしていったね」に変える程度の能力」だった。

## （前書き）

警告！この小説は以下の点で注意が必要です！

- ・この作品は東方Projectの二次創作です。
- ・オリ主TS転生チートモノです。
- ・原作キャラが死にます。
- ・作者の原作知識の欠如により、出てこないキャラがいます。時期的には風神録あたりです。
- ・軽い下ネタがあります。
- ・駄文です。

あ、道路に飛び出そうとしている男の子がいる助けないと間に合えーっトラックガシャーン！以下略

\* \* \*

俺の名前は悉皆屋ゆとり。ひどい名前だろ。これ、本名なんだぜ。俺は至って普通の男子高校生。下校する途中、俺は通学路沿いにある公園に通りがかった。そこでボール遊びをしていた少年が、不注意で道路に飛び出してしまふ。俺は思わず、少年を助けようと身を持ち出し……

「それなんてテンプレッ！」

目が覚めると、知らない場所にいた。見渡せば、青く澄み切った水をたたえる湖。そのほとりに俺はいた。

この状況から冷静に推理するに、俺は異世界転生を果たしたようだ。外見もかなり変わっていた。具体的に言うと、幼女になっていた。真っ白な着物を着ている。湖の水面に映った自分を確認してみるのが、見事に美少女だ。

俺はいつたいこれからどうすればいいのか。ここはどこなのか。ひとまず考えるに、この手の転生モノには必ず主人公補正として特殊能力が備わっている。たとえば、最強の身体能力とか、無限の魔力、全属性魔法使用可能など。俺にも何かしらの能力があるはずだ。

すると、頭の中に自然と俺のもつ能力に関する情報が浮かんでくるとはないか。よし、いいぞ、これで勝つ。俺の能力はズバリ、

これだ。

『あらゆるものを「ゆっくりしていつてね」に変える程度の能力』  
絶望した。

\* \* \*

復活するのに相当の時間を要した。

どうやら、ここは東方Projectの世界らしい。……まさか、俺という個人が幻想入りしたわけじゃないよな。

それにしてもひどい能力だ。まあ、いいさ。弾幕が強ければ問題ないのだ。生前の俺はeasyモードでコンテニューしまくる程度の能力を持っていた。だが、妖怪の人生は長い。練習すればうまくなるだろう。

俺が女になったものの、東方の世界が関係しているのだろう。おそらく、ZUN神のお導きだ。幻想郷は基本的に少女しか受け付けない。

そうそう、確認しておくが俺は妖怪のようだ。体の中に雀の涙ほどの妖力を感じる。人や神や魔法使いやその他もろもろではない。バカヤロウ！俺はまだ高校生だから魔法使いじゃねえ！

とにかく、手始めに近くにだれかいなか探してみようと思う。今の俺の妖力では弾幕勝負をふっかけられて、メタンメタンにされそうな気がするが、一人でいるよりマシだ。

しばらく歩くと、小さな子どもの笑い声が聞こえてきた。幼女二人がたわむれている。チルノと大妖精だ。カエルを捕まえて遊んでいるらしい。

「やあ！こんにちは！」

俺はさわやかに挨拶する。チルノと大妖精がこっちを見た。

「あんだだれ？この辺じゃみない顔ね？」

「俺は悉皆屋ゆとり、外の世界から来たフリーの妖怪さ！それにしても、嫌な事件だったね」

「事件って何が？」

しかし、生チルノが見られるとは転生オリ主さままだな。チルノは俺のことをぶしつけにジロジロ眺めてくる。

「あんだ、見るからに弱そうね。そうだ！弾幕ごっこしましょ！あたいが訓練をつけてあげるわ！」

こいつ、明らかに俺の妖力を見て、戦いをしかけてきやがった。だが紅魔館では、俺はだれよりも多くチルノと闘って来たんだ。もはや、お前の弾幕のパターンは見切った。ちなみに咲夜さんと闘ったことはない。でも、スペカすら持っていない今の俺には、弾幕合戦を受けて立つこともできないという。

「いやあ、あの最強と名高い妖精チルノ様と戦おうだなんて、俺程度の実力ではとてもとても」

「え？あんだ、あたいがさいきょーだって知ったの？」

「もちろんです。外の世界ではチルノ様の強さを知らない者はおりませんよ」

大妖精が胡散臭そうな目を向けてきた。まあ、そんなに人気だったら幻想入りしねえわな。チルノより大妖精の方が小賢しそうだ。

「やっぱり、あたいつたらさいきょーね!」

それに比べてチルノの扱いやすいこと。所詮は?ということか。よし、ここはうまいこと口車に乗せよう。

「そこで提案なのですが、実は俺の持っている能力を、チルノ様にぜひ活用していただきたいのです」

「あんたって、どんな能力をもってるの?」

「実は、俺の能力は『妖精を最強にする程度の能力』なのです」

「ほんとに!?!」

チルノが目を輝かせて食いついてきた。一流の釣り師は竿のしなりを見たとき、すでにしてその獲物が釣れるか否か判断するという。これは……釣れた!

「チルノちゃん、信じちゃだめだよ。この人、すごく怪しいよ。そんな能力あるわけないよ。『妖精を』って限定してるあたり、怪しさ爆発だよ」

「ええー?そう?でも、本当だったらどうするの?さいきょーになれるのよ!?!」

ちっ、大妖精、めんどくせえ奴だぜ。

チルノはかなり迷ったようだが、意を決したように俺に向き直っ

た。

「いいわ！あんたの能力をあたいに使いなさい！」

「チルノちゃん！」

「大丈夫よ！たとえ嘘だったとしても、こんなミジンコ並みの妖力しか持たない妖怪の攻撃なんてあたいには効かないわ」

「嘘ジャナイデスヨ。最強二ナレマスヨ」

必殺、ゆつくりビーム！

俺の指から放たれたビーム状の弾幕がチルノを貫く。

「ぐっ……これで、あたいはさいきょーに……きゃあああああ  
あ……

ゆつくり？してってね！」

やあつたぞ！実験は成功だ！

先ほどまでチルノがいた場所には、嫌悪感を催す微笑をうかべた生首饅頭が転がっていた。そして、頭部のないチルノの体も転がっている。頭だけゆつくり化するのか。グロいな。

「あーはっはっはっはっはっは！ばかめ、まんまと騙されおつて！」

「チルノちゃん！？あなた、なんてひどいことを！」

「おおっと、動くな。俺に逆らえば、この『ゆつくりちるの』が



どうなるか……わかつているな？」

「ゆっくり？っていつてね！」

俺はチルノだったものを抱えあげ、大妖精を脅す。大妖精は発射しようと集中していた弾幕を解除する。

「そう、それでいい。では、お前もゆっくりしていけ」

ゆっくりビーム！

「いやっ、やめてえええええ……」

ゆっくりだいていつてね！」

ちよろい。ゆっくり化してしまえばこちらのものだ。

それと気がついたのだが、さっきからゆっくりちるのを抱いているのに、暴れる様子がない。変身させる前に、あんなに外道なことをしたのに、どういうわけか俺になついていた。大妖精も同様に逃げる様子がない。どうやらゆっくり化させた奴らは、俺を主人として慕うようになるらしい。

「楽しいなあ、楽しすぎるぞ！……うん？」

そのとき、俺は自分の体の中に何か異質な力が満ちていることに気づいた。妖力ではない。霊力でも、魔力でも、神力でもない。この力は……ゆ力！？

その不思議な力、ゆ力は二匹のゆっくりから流れこんでいることがわかった。神力は人間の信仰心を集めることによって高まるという。ならば、これはゆっくりの信仰心が集まった力。なるほど、

俺はゆつくりを増やせば増やすほど、パワーアップすることができ  
るらしい。

「ふふふ、なるほど。この力を使えば、幻想郷を支配することも  
可能ではないか」

俺の壮大なる野望、ゆ霸道の幕開けだった。

その一歩として、チルノと大妖精が持っていたスペルカードをぶ  
んどった。ゆつくりには不要な品だ。俺が有効活用してやろう。

カードを持って念じると、技が表現された絵が浮かび上がるよう  
だ。やってみた。

ゆ符「ゆつくりして逝ってね！」

\* \* \*

言っても幻想郷は広い。

ろくに原作知識もない俺はこの辺りの地理など知っているはずも  
ない。ゆつくりどもに聞いてみても、「ゆつくりしていつてね！」  
としか言わないので蹴り飛ばしたくなる。

ゆつくり二匹を引き連れて、道なき道を進んでいく。超歩いたよ、  
俺。もうこれ遭難してるんじゃないかと思うほど歩いた末、ようや  
く開けた場所に出た。

「おお！ビューティフルな場所だ」

そこは花畑だった。あれ？花畑って、なんかやばい妖怪がいた気  
がしたんだが……思い出せない。ということは気にするほどの強敵  
はいないのだろう。

そういえば、俺は「あらゆるものを」ゆつくりにできる。という

ことは、妖怪や人間以外でもゆつくりにできるのか？

俺はゆつくりビームを花に向けて照射してみた。

「ゆつくりしてってね！」

「おおーっ！ゆつくりだ！」

花の中央にゆつくりの顔がもこもこ生えてきて、ゆつくり顔面花が咲いた。面白いのでゆつくりビームで辺り一面、焼き払う。

「ゆつく「ゆ「ゆつくりして「ゆ「ゆつくりし「ゆつく「ゆつくりしてってね！」りしてってね！」てってね！」つくりしてってね！」つくりしてってね！」つくりしてってね！」りしてってね！」

「ぎゃーっはっはっはっは！テラキモスううう！」

やばい、このキモさ半端ねえ。よし、この花畑をゆつくり花畑に変えて、幻想郷一のホラースポット（笑）にしよう。

「そうと決まれば、もっとビームの出力をあげて……」

「あなた、私の大切な花たちに一体、何をしてくれたのかしら？」

背後から圧倒的な妖力を感じた。俺の妖力がゴミに思えるほどの差だ。振り返ると、そこには日傘をもった少女がいた。こいつは……

「げっ、風見幽香！幻想郷でも最強クラスの大妖怪じゃねえか！  
なんで、こんなところに……」

「あら、ご丁寧に説明ありがとつ。ここは私の花畑よ。死ぬ前に一つ、勉強になったわね？」

やべえ俺のセリフ、モロ三下感丸出しじゃん！そうか、忘れてたぜ。ゆうかりんは花の妖怪だった。

謝っても無駄だろうな。多分、土下座したらそのまま頭部粉碎されそうだ。

正面切って戦えば、一秒で決着がつくだろう。転生そうそう死亡するなんてそんなの嫌だ！

「こうなったらしかたない……いけ！俺のゆっくりちるの！君に決めたっ！」

「ゆっ！」

時間稼ぎにしかならなさそうだが、饅頭チルノを生贄にささげよう。モンスターボールのごとく、チルノを投げる。こいつで足止めして、その隙に逃げる！

「なにこれ」

ブシュッ！

「ゆばっ！」

ゆうかりんの足元に転がっていったゆっくりちるのは、日傘の先端で串刺しにされた。足止めにすらならんとは、想像以上の弱さ。ゆっくりちるのは脳天を傘で刺され、口から餡子を噴き出して即死した。はい、はやすぎるぞオオオオ！！

「餡子が傘についた……ほんとにあなた、不愉快ね。ここまで私を怒らせた妖怪は久しぶりよ」

やばい、死亡フラグがさらに濃厚に。

「ご、ごめん！悪気はなかったんだ！出来心なんだ！（ほら、お前もいけ！チルノの死を無駄にするな！）」

「ゆ！ゆ！っ！」

俺は口で謝りながら、苦し紛れのゆっくだいようせいを投入する。チルノがピチュったのを見てびびったのか、饅頭大妖精は抵抗している。しかし、俺は構わず放り投げた。

「ゆ！！」

「目ざわりよ」

パァァン！

通常弾一発でけし飛ぶゆっくり。餡子がむなしく飛び散った。

「ま、持ってくれ！頼む！殺さないでくれ！」

「いいわ。もっと命乞いしなさい。その苦悶の表情を見ながらいたぶるの、悪くないわ」

このドS妖怪が！我々の業界ではごほうびですってか！？俺はその業界には、まだ所属してねえんだよ！

なんでだよ！ちよっと、花畑にいたずらしたただけだろうが！殺す

までするか、フツー！？ゆっくりたちがいなくなった今、俺にできることなんて何もない。なけなしの妖力を振り絞ったところで、撃てる弾なんてせいぜい十発程度。余裕で死ぬる。

ゆ力を使えばもう少し撃てるかもしれないが、チルノと大妖精が死んだ今、ゆ力残っていない……あれ？なぜだ？ゆ力が以前よりも増している。

はっ！そうか！

「……」

「急におとなしくなったわね。命乞いはもうおしまい？じゃあ、殺すわね？」

「……くつくつく」

「……何かおかしいのかしら？」

幽香は怪訝なまなざしを俺に向ける。悪いが、この勝負、俺の勝ちだ。

「さて、じゃあ最後の悪あがきでもさせてもらおうか！！」

俺は懷からスペカを取り出し、高く掲げる。

「スペルカード！？この期に及んで往生際が悪い。あなた程度の小妖怪じゃ、私を傷つけることすらできな……！！？」

幽香はすでに俺の術中にはまっていることに気づいただろう。しかし、もう遅い！お前は俺のゆっくりたちに囲まれている！

「そんな私の花たちが！」

ゆつくり花と言えど、ゆつくりはゆつくり。その花弁が一斉に幽香の方を向いていた。そして、その一つ一つからゆつくりビームが発射される。四方八方からあびせられる弾幕に対して、幽香は逃げる事ができなかった。変わり果てた花の姿に気を取られたのかもしれない。

ゆ符「ゆつくりして逝ってね！」

「そんな、この私が！くっ、あああああ……」

ゆつくりマスパって行ってね！」

勝った。俺は、勝った。

「勝ったぞうぽおおおおお！！！」

「「「ゆっ！！」「」」

ゆつくり花たちが俺を祝福してくれた。俺は生き残ったのだ。

「ふっはっはっは、あのゆうかりんも、ゆつくりになってしまえば怖くない！」

「ゆつくりマスパって行ってね！」

俺をゆつくりゆうかを持ちあげ、そのほつぺたを引き延ばしてもてあそぶ。

「ほーれ、ほーれ、どうしたあ！俺を殺すんじゃないのかあ？」

「ゆ、ゆっくり、ますばあ」

そこで俺は気づいた。ゆっくりゆうかにみなぎる力に。

このゆっくりは強大なゆ力を内包している。おそらく、もともと大妖怪だったときに持っていた妖力が、ゆっくりになることによってゆ力に変換されたのだろう。

このゆ力があれば、俺は大妖怪とも戦うことができる力を手に入られる！

「喜べ。お前は、俺の礎となるのだ」

「ゆ？ゆ、ゆっつう！！」

俺はゆっくりゆうかにかぶりついた。頭からむしゃむしゃと巨大饅頭を食べる。

ムシャムシャガツガツ！ムシャムシャガツガツ！

抵抗されたのは始めの少しの間だけだった。やわらかいその生地にかみついて、饅頭皮をはぎとり、中の餡子に到達するときには、もう息絶えていた。

そうして、俺はゆっくりゆうかを完食した。

「あややや！こ、これはビックニュースです！」

そのときの俺はゆっかりんを食べるのに夢中で、空からこちらを見ていた者がいることに気づかなかった。



\* \* \*

「はあー、こう平和だと退屈でしかないわ。なんか、適当に異変おきてくんないかしら」

ところかわつてここは博麗神社。今日も脇巫女霊夢は、参拝客の少ない神社で暇を持て余していた。

「号外ーっ！号外だよーっ！」

「また、号外……今度はどんなくだらない記事が載ってるんだろ」

烏天狗の新聞屋、射命丸文の書く記事はいつもいい加減なものばかり。号外と言っても、それほど大した内容のものではないだろうとタカをくくる。

しかし、やることもないので、その声につられて境内まで出てきた。

「あ、霊夢さん！大事件ですよ！あの花の大妖怪、風見幽香が殺されたんです！」

「え、それホント？」

にわかには信じられない。渡された新聞には、写真が映っていた。花畑で対峙する二人の妖怪。その写真の下に、大きな見出しがついた写真があった。

「『風見幽香食われる！これが衝撃の捕食シーン』って、あんた、もっとまじな嘘つきなさいよ」

「なんですか！食べられてますよ、ほら！」

そこには、饅頭生首をむさぼる小妖怪の写真がある。どうみても、この饅頭が風見幽香とは思えない。

「違うんです！これが、この妖怪の能力なんですよ！こいつの弾幕に当たった者は、この姿に変えられてしまうんです！」

胡乱気な表情で文を見つめる。正直、信じがたい話だ。しかし、文の記事はいい加減なものばかりだが、ソースはちゃんとあるネタだ。ここまで大それた嘘記事を捏造したとは思えない。

もし、これが事実だとすれば、少々厄介なことになるかもしれない。あの風見幽香を倒すほどの存在が、急進出したとなれば幻想郷のパワーバランスに影響が出かねない。これは調査する必要があるだろう。

「わかったわ。ちょうど暇してたところだし、私もこの妖怪と接触してみる」

「ホントですか！？帰ったら、お話聞かせてくださいね」

「あんたが直接、取材に行きなさいよ」

「無理ですよ！だって、怖いじゃないですか」

霊夢はため息をついて、神社から飛び立った。

\* \* \*

「ふははは！次はどこから攻めようかいのう」

道中、有り余るゆ力を用いて、わんさかいる小妖怪や妖精などを手当たり次第にゆつくり化しまくった。俺の周りには、蠅のようにゆつくりようせいが数体、飛び回っている。まるでオーブ。

それと、俺の白無地の着物におかしな模様が浮かび上がってきた。ゆつくりだ。マジでどうにかしたかったが、俺の持っている服はこれしかないのであきらめて我慢した。服が変わったところで、どうせまた浮かび上がってきそうな気がする。これもゆ力の影響か。

俺は道に迷うといけないので、湖のそばまで戻ってきた。とてつもない道のりだったが、帰りはゆ力を用いた飛行術を使ったのでかなり時間を短縮できた。空から見ると、俺がどれだけウオーキングしたのかよくわかる。ふと見れば、湖の近くに大きな洋館があるではないか。あのまっかつかな外観は紅魔館で間違いあるまい。最初ここにいたときは、霧が濃くて見えなかったのだ。

紅魔館に行くと、門の前で美鈴が寝ていた。

「ゆつくりビーム！」

「ゆつくりちゅうごくっていつてね！」

瞬殺か。さすがは居眠り大魔王、隙しか見当たらない。

「リアルではあれほど苦戦した紅魔館の攻略も、案外簡単に終わるそうだな」

「それはご期待に添えず、申し訳ありません」

はっと息をのむ。こんな気配を微塵も感じさせない登場をするの

は、あの人しかない！

俺は瞬時に、自分の体の周りにゆっくりシールドを展開する。その直後、体にぶつかってくるミニサイズゆつくりたち。これはナイフをゆつくり化させたものだ。俺の着物が餡子まみれじゃねえか。

「今の攻撃を防いだか。見た目によらず、やるようね」

十六夜咲夜。紅魔館のメイド。完全で瀟洒なあの人だ。この漢字が読めずに、俺は何と発音すればいいのか長いことわからなかった。これは「しょうしゃ」と読むんだぜ！え？知ってるって？

「見かけによらずとは失礼だな。俺のこの膨大なゆ力を見よ！」

「ゆ力？何のことかわからないけど……」

ナニ？ゆ力を感知できないのか？

だが、それはむしろ好都合だ。ただの小妖怪と誤解してくれた方が、油断を誘って便利だ。俺の妖力はカスだからな。

「それよりも、うちの門番に何をしたの？はやく元にもどしなさい」

「いや、戻し方わからないんだよね」

これは本当だ。俺の能力は『あらゆるものを「ゆつくりしていつてね！」に変える程度の能力』。変えた後のことは知らん。

「あくまでしらをきるか。いずれにしろ、あなたの身柄はお嬢様に預けることになるけれど、いいわよね？」

「レミリアか。なるほど、俺の手でカリスマブレイクしてやるのもいいかもしれん。だが……」

咲夜がナイフを構えるそぶりを見せる。しかし、俺は動じない。瞬きをするほどの短い時間。勝敗は決した。

「な、なにが、起こって……」

咲夜の体が倒れる。全力疾走した後のように荒い息をつき、起き上がることもままならないほどに体力を消耗している。

「説明してやろう。俺のシールドを無効化するために、能力を使っただろう。時間を止めて、その隙に仕留めようとした。だが、残念ながら君の能力は、すでにボクが掌握している」

俺はクイツと眼鏡をあげる動作をする。かけてないけど。

「どういう、こと、なの……？」

「俺は『あらゆるものを「ゆつくりしていつてね!」に変える』チカラをもつ。すなわち、君の能力を改竄することも可能というわけだ」

「馬鹿な……あなたの能力の詳細がわからないが、いくら強大な能力と言えど、能力の定義に関わる変更を加えることはできないはず……」

「ゆうかりんの尊い犠牲によって高まった俺のゆ力をなめるな! お前の周囲の時間を“ゆつくり化”した。すなわち、お前の能力は

「時間を操る程度の能力」から「ゆつくり時間を操る程度の能力」になったのだ！これによりお前の能力にゆつくり属性が付加された。ゆつくり時空を時間操作するためには、大量のゆ力が必要となる。しかし、お前のもつゆ力は一般人の平凡な値だ。時間操作しようとしただけで、ゆ力を使い果たし、ゆ力切れでダウンすることは目に見えている。よって、お前の負けだ！十六夜咲夜！」

「意味が……わからない……」

だろうな。俺もよくわかんねえよ。

「お前もゆつくりになれ。そうすればわかる」

ゆつくりビーム！

「……ゆつくりいぬっていつてね！」

メイド長を下した。やるな俺。最高にクールだ。

今は昼だから、吸血鬼のれみりやは寝ているのだろうか。  
いちいち玄関から入って階段を上がるのも面倒なので、ゆつくり飛行術で飛んで二階のバルコニーに降りた。

「咲夜？」

部屋の中から幼女の声がする。俺は恭しく返事をした。

「いかがなさいましたでしょうか、お嬢様？」

「っ！あなたはどちら様？」

レミリアの紅い眼が俺を見据える。だが、甘い！

「くっ！な、なにこれ！？やだ、気持ち悪い！」

「それこそが、ゆっくり運命！」

レミリア、お前のゆ力では俺のゆっくり運命を見ることはできない。絶えず微笑み続けるいやらしいゆっくりの笑顔で塗りつぶされた、俺のゆっくり運命を網膜に焼きつけよ！その嫌悪感に、お前は耐えられないだろう。

「そして、ゆっくりビーム」

「きゃあああああ……」

ゆっくりうー　していつてね！

\* \* \*

「すみませーん、この本、借りたいんですけど！」

「はい、ちょっと待っててください！」

「ゆっくりビーム！」

「え、いきなり、なに……」

ゆっくりこあっていつてね！

図書館に來た俺はさっそく小悪魔をゆっくり化する。相変わらず俺の能力は最強だなあ、はっはっは。

「あ、あなた、小悪魔になにを……！？」

小悪魔を下した直後、だれかが俺に声をかけてくる。

ん？なんだ。紫もやしもいたのか。動く大図書館こと、魔法使いパチュリー・ノーレッジである。

「み〜た〜な〜！」

クワアアアア！

俺はゆ力を全身にみなぎらせ、飛行術を行使する。妖力じゃ飛ぶこともままならそうだからな。

「いったい何者？こんな不審者の侵入を許すなんて、咲夜は何をしているのよ」

そこで美鈴の名前があがらないところが、紅魔館クオリティ。

「すでに上の連中は倒した。もはや紅魔館に残っている者はお前とフランドールだけだ！」

「なんですって……とにかく、あなたはここで止めるわ。火符「アグニシャイン」！」

パチュリーは図書館の天井近くまで舞い上がると、こちらにむけてスペルカードを発動する。続けざまに放たれる炎の弾幕が俺を襲う。



「ククッ……かゆい」

「なに!?!」

しかし、俺のシールドに当たった弾幕はすべてゆっくり化される。ゆっくりなど当たったところでどうということはないのだ。せいぜい、俺の着物が餡子でベトベトになるくらいの被害である。って、なにしてくれとんねん!?!

「不愉快だツ!」

俺は本棚に手をかけ、ゆ力を上げて一気に押し倒した。それがドミノ倒しのように次々に別の本棚を倒していく。

「あなた、私の本に何を、ごぼっ、ごぼっ!」

思惑通りだ。これだけの古本がしまわれた大きな本棚を倒せば、ホコリが舞う。喘息持ちのパチュリーなら発作を起こす原因になる。卑怯?これは戦略なのだよ。

「貧弱ウ!貧弱ウ!」

ゆっくりビーム!

「げぼっ、そ、そんな、まって、きゃああ……」

ゆっくりむきゅーしていつてね!」

パチュリーはゆっくりぱちえとなり、体と分離して落ちて行った。そして、地面に叩きつけられ破裂。ゆっくりの耐久力では、あの高

度からの落下に耐えられなかったらしい。だが、俺の知ったことではない。

「さて、残るはフランだけか」

地下への道のりは割愛しよう。とんでもなく深いところにあるのかと思いきや、ものの2分であっさりと到着してしまった。原作では、咲夜さんが能力で空間を変化させていたのだろう。ゆっくり化したことで、地下室までの距離は現実的な長さになっていた。

「そこにいるのはだれ？」

「やあ、ぼくは悉皆屋ゆとり。フリーの妖怪さ！それにしても」  
「ry」

フランちゃんは予想通りのロリっ娘だった。ぺろぺろしたいぺろぺろ。

「あなた、フランの新しいオモチャ？」

「違うよ。オモチャならここにあるよ。ほら」

「ゆっくりうー していつてね！」

俺は牢獄の柵越しにゆっくりれみりやをフランに渡す。

「わあ！お姉さまそっくり！これもらっていいの？」

「いいんだよ。それでたくさん遊びなさい」

「ありがとう！」

「ゆっくりうー　していつてね！」

俺は喜ぶフランに笑顔で答えて牢獄を後にした。にこにこと張り付けた笑顔が、次第に邪悪な笑みに歪んでいく。鼻につくような短い押し殺した笑い声が喉の奥から漏れる。そして、俺は着物の懷からリモコンを取り出す。

「クツクツクク……残念。それは、ゆっくりボムだ」

俺はリモコンのスイッチを押した。

\* \* \*

霊夢は異変調査がてら、紅魔館を訪れることにした。一応、異変らしきものが起こっていることを教えておいた方がいいたろう。

まあ、あそこのメイド長ならもうすでに事情を把握しているかもしれないが。それならそれで情報収集になる。

「やつほー、美鈴、ちょっと聞きたいことが……え？」

紅魔館の入りに謎の生物がいた。そいつはどこか美鈴の面影を残しながらも全くの別物。

「ゆっくりちゅうごくつていつてね！」

「め、美鈴？」

この生首饅頭は、文の新聞に載っていたアレにそっくりだ。美鈴

の体は別にあるが頭部がない。美鈴の首があを生首お化けに変えられてしまったのか。ということは、紅魔館は例の妖怪に襲撃を受けたのか？

「ゆっくりいぬっていつてね！」

そこに現れた別の生首を見て、霊夢は驚愕する。その顔は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜とどことなく似たところがあった。咲夜の体らしきものも転がっている。

「そんな、咲夜までやられたの？じゃあ、紅魔館は……」

嫌な予感がした霊夢は屋敷の中へ入る。二階を探してみたが、レミリアの姿はない。図書館へ行ってみた。

「レミリアー！パチュリーー！いるのー！？」

そのとき、部屋の一角でなにやら物音がした。霊夢はその音のする方向へ歩を進める。

「パチュリーー？」

むしゃむしゃむしゃむしゃ……

また、生首がいた。今度は三匹いる。しかし、そのうち二匹はひどい殺され方をしていた。紫髪の生首はビルの屋上から落としたスイカのように叩き割られており、赤髪の生首は側面部に深い傷を負い、中身の黒いドロドロした何かをまき散らして絶命している。

そして、もう一体の金髪の生首はその死んだ二体をむさぼり食っていた。そいつが霊夢の声に気づいてゆっくりと、こちらに振り向く。

「ゆっくりキュツとしてドカーンしていったね!」

「い、いやあああ!」

その瞳にこめられた狂気に霊夢の脚が震えた。食道からすっぱいものが込み上げてくる。猛烈な吐き気をこらえながら、霊夢は紅魔館を立ち去った。

\* \* \*

紅魔館を後にした俺は、行くあてもなく森をさまよっていた。というか、迷った。ここはどこだ。

と、そんなときグッドタイムグで二人組の少女に出会った。一人は金髪で赤いリボンをしたヨダレだらだらの少女で、もう一人は緑髪で頭に触角がついた黒マントの少女?だった。

「おお、ルーミアとリグルじゃないか。久しぶり!」

「そーなのか」

「え? だれですか?」

「俺は俺だあああ!」くられ、ゆっくりキック!

「ちょ、おま……」

ゆっくりシヨタっていったね!」

リグルを不意打ちのキックでゆっくり化してやった。必殺初見殺

し返し。ざまあww

ん？ルーミアがもの欲しそうな目でこちらを見ている。

「なんだ、お前、このゆっくりりぐるが欲しいのか？」

「そーなのだー」

「じゃあ、口を開けろ。俺が食べさせてやろっ」

「あーん」

「ソイヤッ！」

俺は全力でルーミアの口の中にゆっくりりぐるを詰め込んだ。

「ゆ、ゆっくりじょだあああくあwse d r f t g y ふじこーp」

「もぐもぐ……うまいのだー！」

「そうか、それはよかった」

ルーミアは、ゆっくりぐるの踊り食いをお気に召したようだ。それが最後の晚餐となることも知らず。

「っ！な、なんなのだー！体がおかしいのだー！」

ルーミアの体がぼこぼこ変化し始めた。妖力が顔面に集中し、頭部が異常に膨れ上がる。そして、頭部がぼろりと体から離脱した。

「ゆっくりそーなのかーってってね！」

馬鹿め。俺以外の者がゆつくりを食した場合、ゆつくり化は免れない。なぜなら、ゆつくりには、ゆつくりウイルスを大量に保有しており、それに感染したものはゆつくりになってしまうからだ。

俺はゆつくりーみあを頭に乗せて、新たなる敵を求め旅に出た。あ、道を聞けばよかった。

\* \* \*

しばらく歩いていると、いい匂いがしてきた。

そのおいしそうな匂いにつられてふらりとやって来たところは、ヤツメウナギ屋台だ。確か、ミスティア・ローレライだったか。

「よー、みすちー。ちんちん！」

「ぶっ！いきなりなんですか！」

放送禁止用語ではない。よって、伏字にする必要もない。よし、連呼してやろう！

「ちんちん！ちんちん！」

「やめてください！小学生ですか！」

「ただの挨拶だ。魔法の言葉だ。気にするな」

俺は屋台の椅子に座り、隣の椅子にゆつくりーみあを置く。さつきから俺の頭をガジガジしてくるんだよな。おかげで俺の頭が餡子でぐちゃぐちゃじゃねえか。って、今の俺、餡子まみれじゃねえか！どうなってんだよ、幻想郷。

「ヤツメうな重、一つ」

「は、はい。いいですけど、もう言わないでくださいね……」

そう言ってみすちーはうなぎを焼く。女将さんみすちーはいいねえ。ぜひ、嫁に来てほしい。

「俺のために、毎朝ヤツメウナギを焼いてくれませんか」

「プロポーズみたいに言わないでください!」

「ところで、俺はヤツメウナギに替わる新たな食材の可能性に気づいた」

「と、唐突ですね」

「その名も、ゆつくり。そうだ、こいつを見てくれ」

俺はゆつくりーみあを、みすちーに見せる。そして、片手の握力だけでそれを握りつぶした。

メシヤプグチュジュバドロオツ!

「ゆつくりそーなぎゃあああ!」

「きゃああああ!」

飛び散る餡子。もうANKO。それをみすちーに見せつけ、適当にちぎったゆつくりを食べる。



「うまし！どうだ、みすちー。君も食べてみないか？」

「いやです！絶対いやです！」

「なんだと、てめえ！俺のゆっくりが食べねえってのか！ああん！？」

絡み酒ならぬ、絡みゆっくり。俺はゆっくりーみあの餡子をヤツメウナギの生簀に放り込む。すると、ヤツメウナギがゆっくり化した。

「「「ゆっくりしていつてね！」「」」

「ひ、ひどい！私のヤツメウナギになんてことするんですか！？もう怒りました！スペルカードで勝負です！」

「いいだろう！ゆ符「ゆっくりして逝ってね！」「」

「ちょっと、屋台から出るまで少し待ってくださ……」

ゆっくりちんちんしていつてね！」

屋台の中にいたため、身動きが取れなかったみすちーに容赦ない弾幕の雨を降らせた。俺、鬼畜。

「はあー、異変解決の前に腹ごしらえでもしていくか」

と、そのときみすちーの屋台に誰かが近づいてきた。あれは魔女っ娘、魔理沙だ。ヤツメウナギを食べに来たのか。

俺はみすちーの代わりに屋台に入る。ゆっくりみすていは、力

ウンターの端に置いた。

「おい、ミスティア、うなぎ出してくれ……あれ？あんだ、だれ？」

「俺はアルバイトだよ」

「へー、そう」

魔理沙は特に疑うこともなく、席についた。

「うわ！なんだこりゃ、ちゃんと掃除しろよ。席が餡子でべちゃべちゃだぜ！」

「サーセンww」

俺の餡子で真っ黒に染め上げてやるよ！……こいつ元から白黒だった。

「それよりもはやく飯を出してくれ。ちょっと急いでるんだ」

「そりゃまたどうして？」

「実はまた異変が起きたらしい。なんでも今度の異変はヤバイらしいぜ。紅魔館の連中がやられたそうだ」

「へえ、あの紅魔館が。物騒な世の中になったものですねえ」

俺はコップをキュッキュと磨きながら魔理沙に相槌を打つ。

「そうそう、話は変わりますが俺、魔理沙さんのファンなんですよ」

「え、ファン？」

「そうなんです。魔理沙さんのあの派手な魔法をぶっ放すところがたまらない！カッコイイ！はあはあ」

「そ、そうか」

若干、引き気味だが、ほめられたことはうれしいようだ。まんざらでもない表情をしている。

「そこで、ぜひ魔理沙さんの八卦炉を一度でいいから見てみたいと思ってたんです。お願いします！八卦炉、見せて！」

「えー、やだよ」

「そこを何とか！うな重タダにしますから！」

タダという響きにつられたのか、魔理沙は躊躇したものの、しぶしぶ八卦炉を取り出してくれた。

「しょうがないなあ。見せるだけだからな？」

「おおーっ！これが八卦炉かああ！」

「ちょ、おい、こら！返せ！」

俺は八卦炉を魔理沙の手から奪って眺める。魔理沙は身を乗り出

して、俺から八卦炉を奪い返す。だが、もう遅い。

「まったく、見世物じゃないんだぞ……って、なんじゃこりゃあああ!？」

「ゆっ卦炉です」

すでに原形をとどめていない生首饅頭。魔理沙の魔法の源、八卦炉もこうなってしまうばただのガラクタだ。ゆ力がなければ扱うことはできない。

「くっそー、こんなんじゃ魔法使えねええ!」

「あっひゃっひゃっひゃっひゃ! 腹筋崩壊!」

必死にゆっ卦炉を振るう魔理沙を見て、大爆笑する俺。魔理沙は忌々しげにこちらを見てくる。

「さて、では弾幕合戦だ、魔理沙! 正々堂々、勝負しろ!」

「なにが正々堂々だ! お前、卑怯すぎだろ!」

「問答無用! ゆっくりビーム!」

「こんなやられ方するなんて、うわああああ!」

ゆっくりちんち……キノコっていつてね!」

幻想郷のハーレムの主もこの様か。だが、どうやら俺の素晴らしき活躍は異変としてとらえられているようだ。主人公級の奴らを敵

に回したことになる。幸いにして魔理沙は俺の存在に気づく前に倒すことができた。しかし、俺の所業がバレるのも時間の問題だろう。そして、一番の問題は幻想郷最強のあの妖怪だ。もしかしたら、すでにこの現場をのぞき見されているのではないか？

「そこにいるんだろ、出てこいよ、スキマババア」

「ずいぶんと威勢のいい妖怪ね。よほど死にたいと見えるわ」

ドッキイイイインツ！

俺のノミの心臓が縮みあがる。まさか、本当にいたとは。スキマ妖怪、八雲紫。「境界を操る程度の能力」をもつ完璧超人だ。俺のゆ力をもつてしても、苦戦することは必至。

「ど、どこから見ていたんだ？」

「さあ、どこからでしょうね？」

尋常ではない妖力だ。幻想郷の理、つまり人とそうでない者との共存をだれよりも尊重するゆかりん（ゆうかりんではない）にとつて、俺はその秩序を乱す者に他ならない。

「まさかこれほどまでに厄介な妖怪だとは思ひもしなかったわ。おいたが過ぎたわね。消えなさい」

俺の足元にスキマが開く。これに飲み込まれればどうなるか、入ってみた者にしかわからない。だが、それは読んでいた手だぜ！

「とうっ！」

俺は飛び上がってスキマを蹴った。普通ならそんなことはできないが、俺は普通じゃない。蹴られたスキマは中から餡子をぶちまけた。

「なんですって！」

ゆかりんは自分の近くにスキマを開き、その中に入ろうとする。しかし、そこに突っ込んだ手は、異様な感触に包まれた。驚いて引き抜くと、紫の手袋には餡子がべったりと付着している。

「スキマをゆっきりの口に変えてやったぜ」

いつもなら無数の目が見えるはずのスキマの中は、餡子でギッシリ。これではスキマに逃げ込むことはできまい。ゆかりん討ちとつたり！

「ちっ、なんてヤツ……」

ゆかりんは空に飛びあがり、弾幕を撃ってきた。

「はっはっは、俺には弾幕などきかんぐぎゃっ！？」

ゆかりんの弾幕が俺のシールドを突破した。なぜだ！？ゆっきりシールドは確かに展開されている。このシールドを通したものはどんなものでもゆっきりになるはずだ。

しかし、ゆかりんの妖力は俺のゆ力を上回っていたのだ。半分ゆっきり化された弾幕は、威力を落としているものの、俺にダメージを与えてくる。

「い、痛てえ！なんで俺の能力が通用しない！？くそが！なめや

がつてええ!!」

俺の弾幕スキルはかなり低い。歴戦の勇士であるゆかりんとともにやりあっても勝てるはずがない。俺が反撃に放ったゆつくりビームも、危なげなく避けられている。今までの敵はすべて不意打ちで倒してきたが、今回はそうはいかなかった。

「ゆゆ符「ゆつくりビーム大乱射」!」

スペルカードも使った。しかし、俺の方がオサレ気味だ。間違えた。押され気味だ。なんてえげつない弾幕の雨だ。こんなルナティックレベルじゃねえか。初心者なめんじゃねえ。

「弾幕勝負では大したことないようね。おとなしく降参しなさい」

「降参したら許してくれるか?」

「ええ、苦しまずに楽になれるわよ?」

「ははは……そんないやじゃあああ!!」

ゆかりんの弾幕がきつくなってきた。これ以上はシールドがもたない。ぶつかってくるゆつくりから飛び散る餡子で、俺の体はボロボドダ。いや、冗談ではなくまずい。

くそ、BBAのやつマジで手加減がねえ。勝ち誇った笑顔しやがつて、くそくそくそ!

「だがな、俺の能力なめんじゃねえぞ……ほえづらかかしてやるよおお!!」

ゆゆゆ符「真・ゆつくりして逝ってね！」

「何？さっきのスペカと全く同じ弾幕に見えるわよ？こんなもので私を止めることはできな……え？」

俺の弾幕はゆつくりビームだ。このビームに当たったモノはなんでもゆつくりになる。そして、俺はそのビームをこの戦いで数え切れないほど撃った。そのビームはゆかりんに当たらなかったわけだが、無駄になったわけではない。

「……ゆー！！」「……」

その声は地上から聞こえた。ゆつくりビームによってゆつくりになった、ゆつくり木、ゆつくり草、ゆつくり石、ゆつくり妖精、ゆつくりりりーほわいなどが俺のためにゆつくりビームを撃って援護してくれたのだ。一つ一つのビームは大した脅威ではない。しかし、それが無数に集まって、攻略不能の大弾幕となる。

その隙間ない絨毯爆撃がゆかりんに襲いかかる。いかにスキマ妖怪といえど、スキマを封じられた今、この弾幕から抜け出すことなどできない。

「勝負あったな、スキマBBAあああああ！！氏ねえええええ！！！」

地上と空からの十字掃射に、ゆかりんは飲み込まれた。

俺は力尽き、地上に落ちていく。下にいたゆつくりたちが俺を受け止めてくれた。体中、傷だらけだ。あと餡子だらけだ。もう動く気力もない。

俺はゆかりんがいた場所に目を向ける。ビームにより浴びせられ



た光が消え去ったとき、そこには誰もいなかった。

「なん……だと……!？」

ゆっくりゆかりんがいない。どういうことだ？ま、まさかスキマから逃げたのか？あの大量の餡子の中に身を投じたというのか。信じられん。なんてやつだ。

しかし、餡子スキマの中の餡子密度はとてつもない。一度入れば抜け出すことは容易ではないはずだ。長居すればゆっくりウィルスに冒され、ゆっくり化する。すなわち事実上、俺がゆかりんを倒したことに違いはない。ゆっくりゆかりんの姿を拝めなかったことは残念だが、俺は生きているという喜びを噛みしめることができ、満足だった。

\* \* \*

俺は傷ついた体を引きずりながら歩いた。まったく、あのババアのせいでひどい目にあっただぜ。どこか、ゆっくり体を休められる場所を探さなければ。

そんなとき、俺の前に粗末な服を着た一人の男の子が現れた。こんなキヤラは原作で見たことがない。里の人間だろうか。

子どもは俺のことをみて、ひどく怯えたように驚き、逃げようとする。そこにもうひとり、別の人影が現れた。

「こら！ちゃんとクラスの皆と一緒にいないとだめじゃないか。一人で歩いたら危ないだろう。この辺りは妖怪が出るかもしれないのだから……むっ！そこにいるのはだれだ！」

その人は上白沢慧音だった。あの家っぽい帽子はまさしくけーねだ。多分、子どもは寺子屋の生徒だろう。遠足にでも来ていたのだ。

ろうか。

けーねは俺のことをすぐに妖怪だと見抜いたようだ。警戒しているが、俺が傷だらけだということにも気づいたらしい。

「待ってください！体が動かないんです！助けてください！」

俺は捨てられた仔猫のような目でけーねに懇願する。

「……妖怪と言えどもここで見捨てては寝覚めが悪いな。しかたない、里まで運ぼう」

やった！けーね、ありがとう！

俺はけーねにおんぶされて、里まで移動した。意外と里は近いところがあり、すぐにけーねの家に到着。

「今、永遠亭の薬を塗ってやるから大人しくしている」

さすが、けーねはいい人だ。永琳特製の薬は俺のHPを瞬く間に回復してくれた。

「本当にありがとうございます。このご恩は一生忘れません！」

「そうか、里の人間に悪さをするんじゃないぞ」

「もちろんです！あ、俺のことを見つけてくれた男の子にもお礼が言いたいのですが……」

「その心がけは結構だが、お前は妖怪だからなあ。私から伝えておくよ」

「いいえ！直接、お礼が言いたいのです！」

「そ、そうか。まあ、お前は良い妖怪のようだし、かまわないだろ。さっきの子なら寺子屋の運動場にいるはずだ。行ってきなさい」

「はい！行ってきます！」

俺はけーねの家を飛び出し、寺子屋に向かった。運動場には多くの子どもたちが集まって遊んでいる。

「みんな、ちゅーもーく！」

俺は朝礼台に立って子どもたちに呼びかけた。人間に近い姿をしているためか、子どもたちは警戒心もなくこちらに寄ってくる。

「俺は饅頭妖怪、悉皆屋ゆとりだ！君たちが傷ついた俺を森で見してくれたおかげで、俺は死なずに済んだ！そこで君たちに俺の饅頭を御馳走したい！」

子どもたちは俺が妖怪であるとわかり、少し怖がっているようだが、饅頭をやると言われて心が動いたようだ。逃げる様子はない。

「さあ、みんな食べてくれ！俺が丹精込めて作った饅頭だ！うまいぞお！」

\* \* \*

「けーね先生！大変です！」

俺はけーねの家を再び訪れた。大声でけーねを呼びながら戸を開

ける。

「お前はさっきの妖怪じゃないか。どうしたんだ、血相を変えて？」

「子どもたちが……子どもたちが！」

肩で息をしながら冷や汗を流して怒鳴りこんできた俺を見て、けーねの顔色が変わった。すぐに家を飛び出し、寺子屋へ向かう。俺もその後について行く。

寺子屋の運動場につくと、そこには想像を絶する光景があった。

「な、なんだこれは……！」

「……ゆつくりしていつてね！」

絶句するけーね。運動場に転がるいくつもの生首饅頭。しかし、その顔の面影をけーねが忘れるはずがない。それはすべて、彼女が寺子屋で授業しているクラスの子どもたちだった。

呆然とするけーねの後ろで、俺は笑いをこらえきれない。なるほど、夜神月の気持ちが今ならわかる！

俺はそつとけーねの背中に向けて手を掲げる。

ゆつくりビーム！

「……っ！」

しかし、けーねは殺気を感じ取ったのか、背後から撃つたのにもかかわらずビームをかわした。そのはずれたビームは運動場の鉄棒に当たって、鉄棒がゆつくり鉄棒に変わる。

「これは、お前の仕業か……」

「げひっ、げひげひっ！そのと〜り〜！」

「この下種がー！」

けーねの妖力が爆発的に高まる。オーラで髪がなびいてるぞ。ど  
んだけキレてんだ？今にも弾幕を撃ってきそうな勢いだ。

「おっと、うかつに弾幕は撃たない方がいいぜ？」

「今さら命乞いか。笑わせるなっ！」

全然、笑ってないけーねが弾幕をぶっ放した。それに合わせて俺  
は運動場のゆっくりたちに呼びかける。

「みんな、俺を守れ！」

「」「」「ゆーー！」「」「」

ゆっくり生徒たちが俺の前に盾のように立ち塞がった。名付けて、  
ゆっくりシールド2！

ブジュギヤジュバドチャグチャズパパドパペゴヘジラスチャー！

「ゆぎゃー！」「ゆ、ゆっぐうううー！」「」「ゆばああー！」「」「ゆ  
「ゆ、ゆっくりして……」

「ああ！私の生徒たちが！」

「どうだ？自分の弾幕で愛する子どもたちをピチュラせた感覚は？」

「き、きさまあああ！！どうしてお前のような妖怪が里の結界を越えられたんだ！？」

「さあな。どこぞのスキマ妖怪が昼寝でもしてんじゃないのか？」

里には人に害をなす妖怪が入ってこられないように結界が施されている。これは八雲紫が作ったものだ。ゆかりんがゆっくり化した今、この里を守る結界は機能していない。

「どうしてだ……お前は深い傷を負っていたところを人間に助けられたのだぞ？どうしてこんな仕打ちができる！？」

「おいおい、俺が人間に助けられただって？馬鹿いつちやいけなियो。俺は自分が助かるように身の振るまいを取り繕っただけさ！げらげらげらげら！」

けーねは憤怒の形相で怒りをあらわにするが、生徒を盾にとられては攻撃することができなかった。

「いいねえ、その顔……最高にしぶれるぜ。さあ、お前たち。大好きなけーね先生が来たぞ。行けえい！骨の髄までむしゃぶりつくしてやれ！」

「……ゆつくりしていつてね！」「」

ゆつくりたちがけーねを取り囲んだ。空を飛べば簡単に逃げられ

る。しかし、ゆっくりたちの顔を見てみると、教え子との思い出が走馬灯のように思い起こされ、正常な思考ができなくなっていた。

「ああ……ああああ……！」

“けーね先生！” “けーね先生！”

「ゆ　っ　く　り　し　て　い　っ　て　ね　！」

「やめろ、来るな……！くるな、う、うわあああああ……！」

\* \* \*

今や幻想郷のいろいろな場所に、「生首饅頭ゆっくり」が発生している。ゆっくり自体はとても弱い生物だが、他の生物や妖怪がそれを食べると、その捕食者がゆっくり化してしまうのだ。そのせいで、被害が拡大していた。

簡単にかたがつくだろうと思っていた異変が、かなり悪化した状態まで進んでしまった。はやく解決しなければ幻想郷がゆっくりだらけになってしまう。

霊夢は次々と襲いかかってくるゆっくり妖精たちを撃ち落としながら、原因の妖怪を探し回っていた。それは人里に近いところを探しているときに起こった。

「なに？ 里の様子が変ね」

もつと近づいてよく見てみると、人里がとんでもないことになっていた。ゆっくりが氾濫している。人々はゆっくりから逃げ回り、捕まった者はゆっくりに群がられている。そんな中、ゆっくりに追われる一人の少女が目に入った。

「阿求！」

稗田阿求だ。霊夢は群がるゆっくりたちを打ち抜いて、阿求のところへ降りる。

「霊夢さん！」

「いったい何が起こっているの？こいつら、どうしたのよ」

「私にもよくわかりません。気づいた時にはこの妖怪が里中に蔓延していて……くっ！」

阿求は足を抑えてうずくまった。

「どこか怪我しているの！？」

阿求が着物の裾をまくると、足に餡子が付着していた。

「……気をつけてください。あの妖怪に噛まれると餡子がくっつきます。その餡子に触れてしまうと……う、うああああ！！」

「阿求！？」

阿求の頭が膨張し、ゆっくり化していく。そして、体から離れたゆっくりあきゆうが霊夢に襲いかかった。バイオ・ゆザード！

「ゆっくりあっきゅんっていつてね！」

とっさのことに反応できなかった霊夢はゆっくりの攻撃を許して



しまった。霊夢のもつとも無防備な場所に噛みついてくる。

「こ、こいつ私の脇に噛みつきやがった!」

脇にこびりつく餡子。霊夢は思わずゆっくりあきゆうをはたき落した。地面にぶつかってつぶれるゆっくり。霊夢は気味の悪いものでも見るように自分の脇についた餡子を手で払いのける。

「うええ……」

しかし、阿求の話が本当ならこれで霊夢もゆっくり化してしまうことになる。あんな姿になるなんて耐えられない。どうにかして治すことはできないものか。

そんなとき、ゆっくりたちから逃げまどう、もう一人の哀れな獲物。というか、ウサギちゃんがいた。

「鈴仙じゃない。こんなところで何してるのよ」

「はっ、霊夢さん!実は幻想郷に新種の生物が大量発生したという噂を聞いて、師匠が新しい薬の材料になるのではないかということで、採取を依頼されたのです」

鈴仙・優曇華院・イナバ。永遠亭のウサギだ。偏屈揃いの幻想郷の中で、割と珍しい常識人である。

しかし、そこで思いついた。永琳の薬ならゆっくり病を治せるのではないか。

「そうだ!永遠亭に行こう!」

「え?急にどうし、きゃああああ!」

霊夢は迷いの竹林目指して全速力で空をかつとんだ。ついでに、うどんげも連れて。

\* \* \*

俺は妖怪の山と思わしき場所にいた。

ちょうど目の前に河童の河城にとりと厄神の鍵山雛がいる。にとりは幻想郷の中でも会いたかった妖怪の一人だ。なぜなら、俺と名前が似ているから。あと、古明地さとりとも会いたい。このスリーショットで写真とりたい。接点、からつきしないけどな。

二人に見つからないように物影に隠れて様子をうかがった。にとりが何かの発明品を作り、雛がそれを手伝わされているようだ。

「ねえ、ほんとにうまくいくの、これ？」

「大丈夫だつて。絶対、うまくいくつて」

なにやら、ベルトコンベアのようなマシンの中に雛がセットされている。

「よし、じゃあ雛、回つて！」

にとりの指示で、雛がくるくる回り出した。その回転を動力としているのか、ベルトコンベアも動き出す。

「より、次はお寿司にぎつて！」

雛は回転しながら器用に寿司を握り始めた。その寿司をベルトコンベアの上を流れる皿に乗せていく。

「やったよ！完成だよ！」

かーっぱかっぱ、かあっぱの、かあっぱずし

ゆっくりビーム！

「きゃあああ！？」

こいつらは何をしているんだ。そのネタをまさか本気でやるとは、おそれいったぜ。これはゆっくりにして正解だろう。

「ゆっくりやくっていつてね！」

「ゆっくりおねだんいじょうしていつてね！」

それにしても回転寿司か。最近食ってなかったな。食べていくか。……カッパ巻きしかねえ。しけてんなあ。

「しかもマズッ！！」

厄い味がした。

\* \* \*

妖怪の山の支配者といえば、烏天狗である。その組織力はかなりのもので、ネットワークは広大。この山にいる限り、烏天狗の目から逃れることはできないと言っても過言ではない。かく言う俺も、山をパトロールする哨戒天狗に見つかってしまった。

「そのあなた、止まりなさい！両手を上げて手を頭の後ろで組み、背中をこちらに向けなさい！」

そこまで言うか。この烏天狗は犬走椋。天狗のくせに犬耳犬シッポがある大変もふもふした妖怪である。

「ま、待ってくれ、俺はしがないフリーの妖怪、悉皆屋ゆとり！怪しいものではないよ」

「しらじらしい嘘を。今回の異変、あなたの仕業でしょう？ちゃんと調べはついています」

ばれてーら。

椋は新聞らしいものをこちらに放り投げた。それを覗き込むと、俺がゆっくりゆつかをお召し上がりになる瞬間がばっちり写されている。「文々。新聞」……射命丸文か。あの盗撮魔め。

「こんな大それた異変を起こす妖怪、どんなものかと思っていれば、何のことはない小妖怪ではないですか。そんな馬鹿みたいな刺繍がついた着物を着て」

「うつせーよ！？俺だって好きで着てんじゃねえ！」

こんなゆっくりデザイン、俺も願ひ下げだ。幻想郷ゆっくり化計画を完遂した後は、もっとちゃんとした服を着るつもりである。

「妖怪を見た目で判断すると痛い目を見るぜ？おうおう嬢ちゃん弾幕勝負だ！」

「いいでしょう。負ける気はしません」

「だが、その前にハンデをくれ！」

「は？」

俺は椀に土下座する。それはもうすがすがしいほどにきれいな土下座だった。

「見ての通り、俺は弱い。妖力なんてアリンコ並みだ。だからハンデをくれ！一発、一発だけでいい。俺の通常弾を避けずにくらってくれないか？」

「何をとぼけたことを言っているのですか？そんなことをしてやる義理はありません」

椀は冷たい視線を俺に浴びせてくる。もみじもみもみくせしやがつて、もむぞこら。

「なんだと！？弱い者いじめして楽しいかよ！？」

「弱肉強食がこの山の掟です」

「戦いに身を置くものならわかるだろう。戦士の一挙手一投足、全力でぶつかりあい拮抗する力と力、一寸先に待ち構えているかもしれない死への恐怖！それこそが勝負の醍醐味だろがぁ！弾幕合戦は単なる力の誇示じゃない。魅せるんだよ！美しく空を舞い、色とりどりの光弾を放ち、ときに勇壮と敵を圧倒し、ときに優雅に攻撃をかわす。それが……弾幕なんじゃないのか？」

キリッ！

「だ、だからなんですか？」

「なんですかだとおお！！お前は弾幕の戦士として最も大切なことがわかってない！俺は小妖怪として、とてもお前に敵うような力を持つていない。だが！その絶対的な力の差を乗り越えて、お前に戦いを挑もうとする勇敢さ！わかるか！たとえるなら、お前が天魔に刃向かうようなものだ！そんなこと、お前に出来るか！？」

「い、いや、それは無理ですが……」

「そうだろう！俺はそれほどの強敵を前にしてひるまず、戦おうとしているのだ！しかしだ。お前は俺の百万倍は強い。その戦力差は天地がひっくりかえっても埋められないだろう。ただ、その絶望的な状況の中で光明を見出すべく、俺はハンデを求めたのだ！」

「いや、それとこれとは……」

「ハンデと言っても妖怪史上最弱のこの俺の通常弾を一発だけくらうというささいなものだ！そんなことをしたところで、お前にダメージを与えることなどできないことは分かっている。いや、お前の全身を包む強者のオーラによって、お前は自然体で構えているつもりでも、俺の脆弱な通常弾はそのオーラにかき消されてしまうかもしれない。それどころか、むしろ跳ね返されて、逆に俺が被弾し、致命的な重症を負うかもしれない。でもな、俺はその一発にすべての希望をかけているんだよ！お前という強大な存在に、矮小でゴミクズ以下の力しか持たない俺が立ち向かうためには、そのたった一つの希望が必要なんだ！無意味なことだったのは、わかってる。こんなことをしたところで俺はお前には勝てない。ただ、俺に戦う勇気をくれないか？それともお前は、ありったけの勇気を振り絞って

戦いに臨もうとする者の希望を奪うのか？うつうつ……俺のような弱者をひねりつぶし、何の感動も得られない弾幕に興じることをするのかあ！ぐつつぐつ！そんなのって……そんなのってあんまりだろおおおおおおお！！それが白狼天狗犬走椛のやりかたかああああ！！うあああああああ！！」

俺は土下座したまま泣いた。椛は困惑気味に涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった俺の顔を見てくる。ここまで自分を貶める妖怪がかつて、この妖怪の山にいただろうか。そのあまりの情けなさっぷりに、椛は憐憫の感情を禁じえないのだろう。深くため息をつく。

「はあ……わかりました。そこまで言われては、無慈悲に戦うこともできません。そのハンデ、認めましょう」

「えぐつ、えぐつ、ほんとに……？」

「はい、本当ですよ。だからまずは涙をふきなさい」

椛は親切にもハンカチを渡してくれた。俺は涙と鼻水を拭いて、さらにもう一回鼻をからでから椛に返す。

「じゃ、じゃあ、一発だけ当てるよ？どこがいい？痛くないところに当てるから」

「どこでもいいですから、気にせず当てなさい」

「そう？じゃあ、いくよ？」

ゆっくりビーム！

「ゆっくりもみっていつてね！」

「……えへ、えへえへ」

やーっちゃった、やっちゃった もみじをゆっくりにかえちゃった

「えへえへへへあへふひほほほほほ！ーげーらげらげらー！あひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃあー！」

ぶあああああかがあああー！泣き落としてコロツと騙されやがって！幼女だからって中身は真っ黒けの腹黒妖怪なんだよ！ざまあwもみじざまあw

「美しく空を舞い、色とりどりの光弾を放ち、ときに勇壮と敵を圧倒し、ときに優雅に攻撃をかわす？それが弾幕の醍醐味？違うねッ！勝てばよからうなのだああー！」

「ゆっくりもみっていつてね！」

俺は自分の着物を脱いで全裸になると、椀の服を脱がせ始める。別に今から椀とめくるめくわんわんタイムが始まるわけではない。服を着替えるのだ。指名手配されている以上、変装した方が得策だ。ここは犬走椀になりきるうではないか。

しかし、椀になりきるためには犬耳が必須。どうしたものか。

「ゆっくりもみっていつてね！」

そこで、ゆっくりもみじが目にとまる。俺は、つかつかとゆっくりに近づき、その犬耳を手でつかんだ。



プチッ！

「ゆぐああああああ！！」

ゆっくりもみじから拝借した犬耳を頭にセットする。餡子を接着剤にしたのでずれ落ちないぞ。

……うん、無理があるな。椀の妹と名乗ることにしよう。

\* \* \*

「お、おおお重めえええ！！」

俺は椀の剣を持って山を登ったのだが、これがまた重い。鉄の塊なのだから当たり前なのだ。こんなものぶんぶん振り回す方がおかしいのだ。重すぎて飛行するのも一苦労だ。

しかし、椀の妹という設定なのだから、別に剣を持っている必要はないのではあるまいか。そのことに気づいたのは、守矢神社に付いたときだった。

「くそがつ！重労働させてんじゃねえぞコラ！」

でもせっかくここまでもってきたので、捨てるのもなんだかもつたない気がした。そうだ。神社にお供えしよう。そうすれば御利益ももらえて一石二鳥だ。ボクってなんて信心深い妖怪なんだろう。

「どっせい！」

賽銭箱に剣を突っ込む。軽く箱が壊れたが、気にしない。

「ふう……いい仕事した」

「あ、あの、参拝の方ですか？」

物音を聞きつけた巫女がこちらにやってきた。東風谷早苗、緑色の現人神だ。ああ、ナメツク星人ではないよ。

「そうなのです。私は犬走栞の妹の栞子と言います！」

「はあ、栞子さん、ですか。ところで、頭のそれなんですが……」

「犬耳のことですか？かわいいでしょ？」

「取れてますよ」

さわってみると、左耳が取れていた。ガッデム。振り返ると、神社の参道にぽつんと落ちている犬耳の片方。

「子どものころから、左耳はよく取れるんですよ、あははははは！」

「そ、そうなんですか」

早苗さんはひきつった笑顔を浮かべている。まずい、これは警戒されているな。緊張をほぐすために、スキンシップを図らなければ。

「唐突ですが、おっぱいをもませてください」

「本当に唐突ですね！？」

「私は犬走家に代々伝わるおっぱいもみみマスター免許皆伝の腕前を持っています」

「どう考えても嘘ですよね！？というかそれは何の称号ですか！？」

「乳癌の検診です」

「路線を変えてもダメです！初対面ですよ！？」

「ぐちぐちうるせえんだよ。信者様がもみてえって言うてんだからおっぱい出せばいいんだよ。信仰しねえぞ？」

「なんで神様より偉そうなんですか！？つて、きゃー！やめてください！」

俺はかまわず早苗さんの巫女服の中に手を侵入させる。ほお、なかなかのものをお持ちですな。

「あ、あうっ！いい、いい加減にしないと怒りますよ！？」

「幻想郷では常識にとらわれてはいけない！」

ドーン！

早苗さんと言えばこのフレーズである。数々のエロ同人で使い古されたこの展開に、逆らうことはできまい。

「幻想郷の常識は現実の非常識。そしてその逆も然り」

「な、なるほど、神様のおっぱいをもむ信者という非常識も、こ

の幻想郷では常識だということですね……ならば、しかたありません、好きなだけ私の胸をもんでください……って、そんなわけあるかああーっ！」

見事な乗りツツコミだ。さすがに、生の早苗さんは一味違う。しかし、体が密着した状態にある今、俺の攻撃をかわすことはできない。

ゆっくりビーム！

「うわ！なにをする、やめ……」

ゆっくり2Pカラーってってね！」

ゆっくりさなえの出来上がりだ。ゆ力の前では神と言えど無力。妖怪の山の厄神で実証済みだ。秋姉妹？だれそれ？

「早苗ー、なんか叫んでたけど大丈夫ー？」

と、そこにロリ神ケロちゃんこと、洩矢諏訪子がやってきた。早苗の変わり果てた姿を見て、仰天している。

「な、なんだお前は！？早苗に何をした！？」

「どうした、何事だ？」

さらにガンキャノン八坂神奈子が声につられて現れた。

「あいつが早苗を変な生き物に変えちゃったんだ！」

「それは本当か!？」

二人はものすごい神力で俺を威嚇してくる。普段はおちゃらけている奴らだが、守矢神社はかなりの信仰力を得ている。その二柱の祀神と一度に対峙すれば、その威圧は途方もないプレッシャーとなった。

「さすがは守矢の神、向き合っているだけで冷や汗が止まらないぜ。だが、わかっているだろうな。俺の手の中にこいつがいるってことを」

「ゆつくり2Pカラーしていつてね!」

ゆつくりさなえを人質にとられては、俺に手を出すことはできないはずだ。案の定、諏訪子と神奈子は苦虫をかみつぶしたような顔で硬直している。

「よし、お前ら、同士討ちしろ」

「はあ!？何を馬鹿なことを!」

「はやく早苗を開放しろ!さもなければ、お前に地獄を見せてやる!」

やれやれ。どうやら、自分の立場ってものがわかっていないらしいな。

俺はゆつくりさなえを地面に置いた。もちろん、開放する気はない。

「俺の言つとおりにするんだ。はやくしないと、サッカーボール

キック、しちやうよ？」

ゆっくりにとつては、ただの蹴りと言っても瀕死に追いやる破壊力になりえる。ずりずり地面をつま先で削るように足を滑らせながら、ゆっくりさなえの手前まで迫り、近づいたところで一気に思いっきり蹴りあげた。

「チョイアアアアア！」

「ゆぎやあああああ！！！」

蹴りの威力は申し分なかった。しかし、踏ん張りすぎた反動で軌道がずれ、ゆっくりさなえの頭頂部を足がかすめる形になってしまった。そのせいで、ゆっくりさなえの頭皮がべろんと剥けて、中の餡子が見えている。

「あーあ、見てみるよ。天下の現人神、風祝の東風谷早苗さんの頭がカパカパしちまったじゃねえか。これじゃ、搭乗ハッチだぜ」

カパカパ、カパカパ

「ゆ、ゆっくり2Pカラーしていつてね……」

「さなええええええええええ！！！」

「もうみてらんないよ、やめたげてえええ！！！」

「次は何をしてやろうか。口の中に手をつ突っ込んで中の餡子をひきずりだそうか？それとも賽銭箱にダンクシュートして、シュレツダーにかけたみたいにスライスするのがいいかな？ほおら、こいつ

をいたぶる手段はいくらでもあるんだ。俺の言うとおりにしろお！」

涙目で頭をカパカパされるゆっくりさなえを見て、二人は決心がついたようだ。二人で向かい合うようにして立つ。

「全力のスペルカードをお互いにぶつけあえ！もちろん避けたり、ガードしたりすんじゃないぞ！諏訪子、お前はミシャグジさまを撃て！神奈子、お前は神が歩かれた御神渡りだ！」

「なんでこいつ、あたしらのスペルカード知ってた！？」

Wikiの力。

「しかたないよ、神奈子。早苗のためだ」

「諏訪子、死ぬなよ」

崇符「ミシャグジさま」

神符「神が歩かれた御神渡り」

「「ぎゃあああああああああ！！」」

弾幕ってレベルじゃねえぞ。こんなバケモノだと正面切って戦えるか。いやあ、ピカピカ光る弾幕はきれいだねい！せいぜい、俺の目を楽しませてくれたまえ！

弾幕が終了したとき、その後にはボロ雑巾のような二人の神が倒れ伏していた。俺は無力化した二人にゆっくりビームを浴びせる。

「ゆっくりケロっていつてね！」

「ゆつくりどすこいしていつてね！」

「ほーら、お前たち。ごはんだよー」

俺はゆつくりすわことゆつくりかなこに、ゆつくりさなえを与えた。

「ゆつくりケロっていつてね！」

「ゆつくりどすこいしていつてね！」

「ゆ、ゆゆうぶがっ！ゆじゃっ！ゆぎゅああー！」

モリモリとごはんを食べるゆつくりたち。たくさん食べて、大きくなれ。

だが、その楽しいゆつくり団欒を邪魔する影が、空にあった。

\* \* \*

チュインチュイン！

何かが俺の背後ではじける音がすると同時に、背中に激痛が走った。

「ぐあああ！！な、なんだ！？」

慌てて振り返れば、そこにいたのは幻想郷最強の紅白巫女、博麗霊夢……あれ？幻想郷って何人、最強がいるんだ？

どうやら、主人公のお出ましのようである。こいつを倒せば、俺



の幻想郷ゆつくり化計画を阻むものはいなくなるだろう。

「いきなり後ろから狙い撃ちするとは、卑怯だぞ！」

「あんたに言われたくないわよ」

「ごもつとも！」

「好き勝手に暴れてくれたようだけど、そろそろ年貢の納め時よ」

「ふっふっふ、俺の年貢を受け取っちゃったら、大変なことになるぜえ？」

ゆ符「ゆつくりして逝つてね！」

前置きもなく発動したスペルカードの弾幕を、霊夢は鮮やかな身のこなしでかわしていく。総合的な飛行能力はずば抜けていた。もはや当たるところが想像できない。ジェラシイイイ！！

「なんのひねりもない単調な弾幕ね。あくびがでるわ」

「……てめえは、俺を怒らせた」

霊夢の能力は「空を飛ぶ程度の能力」。その能力に俺のゆ力を干渉させ、空を飛べなくしてやる！

しかし、俺が自分の能力を使おうとした矢先、霊夢は踵を返して逃げ出した。俺の強さに恐れをなしたか！

「待ちやがれ！」

俺は霊夢の後を追う。

それにしても、とんでもない飛行スピードだ。俺の飛行術では、見失わないように追いつくだけで一苦労だ。だが、ここで逃がしては俺のプライドが許さねえ。必死で後を追いかけた。

霊夢が向かっている先は竹林だ。あそこは迷いの竹林か。どこに逃げようとも無駄だ。ゆっくりれいむにして博麗神社の鳥居に吊るしてやる！

竹林に逃げ込んだ霊夢は、大きな屋敷の前に降りた。ここは永遠亭だろう。

「ぜえ、はあ、ようやく、はあ、観念、ぜえ、したか、はあ！」

ちくしょう息があがってまともにしゃべれん。霊夢の奴、ちょこまかと逃げやがって。おとなしく俺のゆっくりになれ！

「観念するのはあんたの方よ」

「なに……？」

突如、俺の周りに陣が現れる。なんかカツコイ幾何学模様が地面に浮かび上がり、俺を包囲するように光り出す。これは結界か！？あらかじめここに仕掛けられていた罠だろう。

「ふざけるな！もっと、俺たちの弾幕勝負はフェアだっただろうが！こんな人の風上にもおけない姑息な手を使って、お前には恥というものがないのか！」

「黙りなさい。自分のやってきたことを棚に上げてよくもそんな戯言を吐けるわね」

この冷徹女に俺の熱いビートをぶつける作戦は通じないか。しかし、こんな結界なんぞ、俺のゆ力をもつてすれば簡単に破壊できる……あれ？

「ちいい！？俺のゆ力をもつてしても突破できないだ！？なんて結界だ」

「あら、気に入ってもらえたようで何よりだわ」

この言葉は霊夢が発したものではない。永遠亭の門が開いたかと思つと、屋敷の中から誰かが出てきた。三人いる。

「永琳に、うどんげに、ゆ、ゆかりんだと……！」

「その呼び方はやめなさい。不愉快よ」

八意永琳とうどんちゃんがここにるのはわかる。しかし、紫がどうしてここにいるのだ。しかも、ゆつくり化していないではないか！この結界もゆかりんが張ったものなのか！？餡子まみれのスキマに逃げたのならば、ゆつくり化は避けられないはずだ。

「ま、待て！状況がよくわからない！なぜ、俺のダークネス・アンコ・ワールド暗黒餡子世界に堕ちたはずの紫が健康な姿でここにいる！？」

「確かにあなたのせいで、私のスキマはわけのわからないことにされてしまったように見えた。でも、あなたはあなた自身、自分の能力を正確に把握できていないのよ。簡潔に結論だけ話せば、私は永琳の薬で治ったわ」

「え、えーりん先生……マジなの」

えーりん先生は「あらゆる薬を作る程度の能力」をもつ。つまり、ゆっくり化を治す薬を作ったということか。そのへんのことを、えーりん先生が説明してくれた。

「例の生首生物について調べたところ、ウイルス性の感染症が原因で身体組織に異常がでていることがわかったわ。爆発的な感染力を持った半霊体レトロウイルスよ。このウイルスには種類があつて、精神毒を体内で作り出す 型と、身体組織を変質させる 型に分けられる。 型は二次感染力が低く、パンデミックを起こす可能性は低いけれど、空気を媒介にして感染し、強烈な幻覚を見せる神経毒を作り出すの。そのせいで、これに感染した者は著しい能力行使不全に陥ってしまう」

「え？ウイルスが原因？ちょっと待て、じゃあ俺のゆ力は？これはゆっくりたちの信仰の力じゃないのか！？」

「いいえ、あなたの力は相応の妖力だけよ。おそらく、あなた自身が 型に感染してしまっているせいで、「ゆ力」などという幻覚を見ているの。自分が強くなったと感じる幻覚を見ることで、自己暗示をかけているのね。むしろ、自己暗示でそこまで強くなれるのだから能力としては破格よ。能力行使不全に陥っていたとはいえ、紫の妖力弾を受けて生きているなんて普通の小妖怪にはできないことよ。その代わり、受けたダメージは嘘ではない。あなたの体は今、限界寸前まで酷使されて本当なら動けなくなっているはず」

「そ、そんなわけ、あるかよ……！」

そんなこと言うから体が痛くなってきたじゃねえか！なんでだよ！なんでだ！なんで、俺の体、こんなに傷だらけなんだよ！ゆっく

りシールドで全弾、ゆつくりにしただろ！？ゆつくり弾なんて痛くもかゆくもねえんだよ！ちくしょうちくしょう！

「型はさらに厄介ね。汚染された餡子状の物質に接触しただけで発症する感染力をもっている。ごくわずかな潜伏期に異常増殖し、頭部とそれ以外の身体を分離するという障害を発生させるの。頭部はもはや別の生物と化すわ。組織も脆くなり、簡単に壊れる。内部には糖度の高い餡子状の物質が作り出される。ここに大量のウイルスが蓄えられ、他者に捕食されることによって感染個体を増やしていく」

なに余裕ぶって講釈たれてんだよ！それは全部お前の妄想だ！俺の力がウイルスのよるものだって！？ああ、いいよ！それでいいとも！でもな、俺が最強であることに違いはねえ！なすすべもなく、お前らはゆつくり化すればいいんだよ！

「ただ、幸いなことに身体は頭部と別離しても、休眠状態に陥るだけで生命活動が止まるわけではないわ。早期に発見して治療すれば、もとにもどすことは可能よ。そして、すでに 型と 型のワクチンが完成したわ。まだ、ウイルスが体内にない人は一回の接種で完全に予防できる。すでに感染した人でも、潜伏期にあれば数回の接種で治療ができる」

「うるせえ……うるせえ、うるせえうるせえうるせえうるせえうるせえんだよ、俺は最強だああああ！！」

ゆゆゆ符「真・ゆつくりして逝ってね！」

俺のゆつくりビームを最大威力でぶつ放す。俺には「あらゆるものを「ゆつくりしていったね！」に変える程度の能力」がある。「

あらゆるもの」をだ！「あらゆるもの」！すなわち、俺がゆつくり  
にできないものはない！ワクチンだと？予防できる？やれるものな  
らやってみる！

だが、効かなかった。霊夢たちは俺の弾幕を避けもしなかった。  
うどんげはちよつとびつくりしていたが、他の連中は動じない。そ  
して、ゆつくりになった者は、だれもない。

「う、うそだ！ここ、こ、粉バナナ！」

「さあて、ぶちのめされる準備はできたかしら？」

「うふふ、どんな殺し方してやろうか迷っちゃうわ」

「待ちなさい。実験の材料にしたいので殺さない程度にしておい  
て」

「なんだか、ここまでくると哀れに思えてきます……」

上から、俺、霊夢、ゆかりん、えーりん先生、うどんげのセリフ。  
そして、結界という鳥かごに囚われた、自由を奪われた鳥、俺は  
霊夢とゆかりんの弾幕の雨を全身で受け止めた。

「ひぎゃあああああ！ーい、いたいたいいたいいたたたたた  
たたた！ーやめええ！もう死んじやうよおおおお！ー」

「最強のあなたならこれくらいの弾幕どうってことないでしょ？」

「ゆつくりシールドだったかしら？それで防いだらどうなの？」

体中どこもかしこも痛い。包丁でめった刺しにされるような痛み

だ。いや、されたことはないんだけどさあ。

俺はここで死ぬのか。いや、死ななくてもえーりん先生の実験動物にされるという末路が待っている。多分、死んだ方がマシと思われる苦痛を与えられてから死ぬのだ。

そんな人生、許容できるか。俺は自分の胸に問いかけた。幻想郷で最強になるんじゃないかなかったのかよ。こんなところで、こんなウサギだらけの竹林で生涯の幕を閉じるのか？どうなんだ、俺。黙ってんじゃないえ。お前に聞いてんだよ！どうなんだ、俺えええ！！お前はここのままでいいのかよおお！！

「いやだああああああああああ！！」

弾幕が止まった。

俺の叫びとともに、一陣の風が巻き起こる。

ヒュゴオオオオオオッ！

「なんなの、この気迫」

「窮鼠猫を噛むってやつかしら」

俺の体にゆ力が熱くたぎっている。これは幻覚なんかじゃねえ。

幻想なんかじゃねえ！この力は俺の力だ！

だが、まだ足りない。俺のゆ力はこんなもんじゃない！もっとだ！もっと、力を！俺にゆ力を！

「うおおおおおおおおおお！！」

「なに、あれ……」

「自分自身の姿を変えている!?」

そう、俺は俺自身をゆっくり化した。ゆっくりそのものになることで、俺のゆ力は何倍にも増幅する。無限増大するゆ力は、この幻想郷を一変させるほどの力となるのだ!

「ふおおおおおおお!!すばらしいいいぞおおおおお!!  
!おれのからだにいいいい!!ゆっくりのちからがああああ!!  
みなぎってきたああああああ!!  
ああああああ!!!!!!!!!!」

そのとき、俺の遥か頭上に一つの影が現れた。その者は永遠亭のウサギ、因幡てゐ。高く伸びあがった竹の上から、こちらに向かつて落ちてきた。馬鹿め!パンツが丸見えだ!ゆ力を全開放した俺に向かつて無防備にも飛びかかって来たこと、後悔させてやろう!

ゆゆゆゆ符「うざき微笑みアルティメットカタストロフゆつく」  
グシヤア!

\* \* \*

「ていつ!」

グシヤ!

「ゆっああああああ!!」

俺の体に、てゐの裸足がめり込む。俺の餡子が飛び散った。てゐの足の指にめり込んだ餡子が押し出されて餡子団子ができる。てゐ



はウンコでも踏んだかのように自分の足を竹の葉っぱになすりつけながら、えーりん先生のところに帰って行った。

「あゝあゝあゝ……あゝあゝ……あゝあゝ……」

そうか、ゆっくりになったら、防御力、紙じゃん。

こうして俺の第二の人生は終了し、幻想郷の異変は、てゐの足によつて解決した。さようなら、俺の幻想郷。閻魔様にこれからどんな説教をされるのか考えると、鬱になった。

\* \* \*

後日談。

ゆっくり化してしまった幻想郷の住人達を治療するため、永琳は彼女たちの顔にそっくりなパンを焼いた。それを霊夢が「新しい顔よ！」と言って、首がなくなった体に投げつけたところ、見事に合体。元氣百倍になって復活したという。

最後にひとこと。

ゆっくりしていったね！（笑）

END

（後書き）

プロフィール

悉皆屋ゆとり

種族：生首饅頭妖怪

外見は幼い少女。不愉快なデザインをした着物を着ている。

「ゆつくりウイルスを操る程度の能力」をもつ。

幻想郷縁起に名を残す性悪妖怪。その力を使って奇病「ゆつくり病」を蔓延させた張本人。

勝つためには手段を選ばず、騙し討ちを得意とする。スペルカードルールを無視するなど最低最悪な性格をしている。良いところが一つもない。

小妖怪だが、優れた能力をもつため、うかつに相手をすることは危険。だれかれ構わず、攻撃をしかける狂暴性がある。

八意永琳の薬によって、異変は解決した。彼女の薬がなければ、幻想郷は未曾有の被害を受けただろう。幸いにも死者は出なかった。

その後、ゆつくりは駆除指定されたが、森の奥に逃げ込んだ個体が多数おり、今もときおり見かけることがある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1057u/>

---

東方 ゆ 飴 穢

2011年10月7日02時39分発行